

# 近代における奈良「山の辺の道」の形成と 風景イメージの展開

繁田 いづみ<sup>1</sup>・山口 敬太<sup>2</sup>・久保田 善明<sup>3</sup>・川崎 雅史<sup>4</sup>

<sup>1</sup>正会員 日建設計コンストラクション・マネジメント（〒112-0004 東京都文京区後楽1-4-27）

<sup>2</sup>正会員 京都大学大学院工学研究科（〒615-8540 京都市西京区京都大学桂C1, y.kta@kt4.ecs.kyoto-u.ac.jp）

<sup>3</sup>正会員 京都大学大学院工学研究科（同上, kubota@kt4.ecs.kyoto-u.ac.jp）

<sup>4</sup>正会員 京都大学大学院工学研究科（同上, kawa@art.mbox.media.kyoto-u.ac.jp）

本研究は、近代以降に発見、整備されたハイキングルートである奈良「山の辺の道」を対象として、1）近代における「山の辺の道」の名称およびルートの成立、2）そのきっかけとなった『山の邊の道』（1941）の出版の背景と、そこに現れた風景イメージの具体的内容、3）山の辺の道の景観保全施策への位置づけとその変遷、について明らかにすることで、山の辺の道の形成について明らかにした。

**キーワード:** 観光地形成、景観保全、風景イメージ、大阪電気軌道、東海自然歩道

## 1. はじめに

### (1) 背景と目的

由緒ある古社寺や古墳陵墓が点在する奈良・山の辺の道は、豊かな自然環境にも恵まれ、古代ロマンを感じることの出来るハイキングコースとして名高い。近年の入込観光客数は約 20 万人/年という<sup>1)</sup>。「古代から伝え遺されてきた道の上から、古代から大きく変わらぬだろう風景を眺める」というのが、奈良「山の辺の道」観光の決まり文句である。しかし、この道が歴史的に遺されてきた道ではなく、近代において観光振興の下に「再発見」された道であり、選ばれつくられた道であるということはほとんど知られていない。本研究において筆者らが明らかにしたいのはこの点であり、またその理由と背景である。さらに、本研究では、戦前までの近代日本における「郊外の風景の発見」という潮流<sup>2)</sup>のなかで、「山の辺の道」において評価されるに至った風景のイメージとはどのようなものであったか、さらには「山の辺の道」はどのように景観保全施策へ位置づけられるに至ったかという点についても明らかにしたい。

研究の手順は以下の通りである。1）観光案内本や雑誌等を用い、近代における「山の辺の道」の名称およびルートの成立を明らかにする、2）そのきっかけとなった『山の邊の道<sup>3)</sup>』（1941）の成立背景と、そこに現れた風景イメージの具体的内容を明らかにする、3）風致地区指定から歴史的風土の保存、国定公園化、

東海自然歩道の整備へと至る景観施策の過程を明らかにし、山の辺の道の景観保全施策への位置づけとその変遷を明らかにする。以上により、近代における「山の辺の道」の形成について明らかにする。

本研究が、近代の都市・郊外の景観形成史、景観評価史研究として位置づけられるにとどまらず、歴史的資産を有する地域での「道」を軸とした風景づくりや地域イメージ形成等に示唆を与えることを期待する。

### (2) 対象地概要と研究の位置づけ

現在、東海自然歩道とほぼ重なって走る<sup>4)</sup>「山の辺の道」に関して、簡易な旅行案内から専門的な地誌まで数多く出版されており<sup>5)</sup>、その他、山辺の道を取り上げた大和路関連の図書や雑誌等を含むと数え切れないほどある。この意味で、「山の辺の道」という名称およびそのイメージは定着しているといえる。

この名は、『日本書紀』に崇神・景行天皇陵を「山辺ノ道上陵」としたことに始まる<sup>6)</sup>というが、実は中世から近世までの地誌には、「山の辺の道」という名はほとんどみられなかった。幕末以降『打墨縄』（1848）や地誌『大和志料』（奈良県編、1914）に、「山の辺の道」という名が再び現れ始めたものの、『大和志料』の「山辺道-奈良ヨリ布留ヲ過ぎ長谷ニ達スル道路ヲ上津道ト云フ、即チ山辺道ナリ」の説明は、山の辺の道と上ツ道とを混同しており、正確さに欠けるものであった。また、現代のハイキングルートが古代の「山辺道」と同一であることは、史料から知ることができないこと、「山の辺の道」の手掛かりは『日本書紀』の

記述に限られること、を千田稔氏が示している<sup>7)</sup>。

では、現在の「山の辺の道」という道が、いつから観光ルートとして用いられ始めたか、また、そのルートはどのようなものであったか、という疑問が生じる。

山の辺の道に関連する研究は、主に古代史の分野で多くなされてきた。近代において「山の辺の道」がいつから成立したかについては、和田萃氏が『山の辺の道』（1941）の出版以降ではないかと指摘する<sup>8)</sup>にとどまり、その他に実証的に明らかにした研究はなく、また、その形成とともにあった風景イメージの展開についても同様に明らかにされていない。

## 2. 「山の辺の道」前史の観光

### (1) 観光案内書にみる名称と観光対象

明治以降の観光案内書のうち、後の「山の辺の道」、地名でいうと「三輪石上」の周辺の名所や地名が見られるものを網羅的に調査した。その結果、その記述内容の量と質から、次の10冊の観光案内書を代表的なものとして取り上げた。『大和巡<sup>9)</sup>』、『大和名勝<sup>10)</sup>』、『新撰名勝地誌巻1 畿内之部<sup>11)</sup>』、『大和名所案内<sup>12)</sup>』、『大和めぐり<sup>13)</sup>』、『大和名所舊蹟案内<sup>14)</sup>』、『大和巡禮：史蹟と古美術<sup>15)</sup>』、『大和名所新案内<sup>16)</sup>』、『大和めぐり<sup>17)</sup>』、『肇国の聖跡を巡る<sup>18)</sup>』である。

観光対象としては、石上神宮、大神神社、大和神社の三大官幣大社が、初期の段階から取り上げられており、他の山の辺の道に点在している史蹟古社寺も、年を経るごとに徐々に名所として取り上げられたことがわかる（表1）。「山の辺の道」の名称は、近畿観光会の母体である関西急行鉄道（大阪電気軌道の後身）によって出版された『山の辺の道』（1941）発行までの間には、『大和巡礼：史蹟と古美術』（1930）に「山邊道沿」と唯一記載されるのみで説明はなく、他の本には全く見られなかった。このように、昭和15（1940）年までは、観光案内書において「山の辺の道」という名称はほとんど用いられていなかったが、その周辺の史蹟は鑑賞対象として、評価を受けはじめつつあった。

表-1 案内書における名所の記述

| 名所       | 大和巡 <sup>9)</sup> | 大和名勝 <sup>10)</sup> | 新撰名勝地誌巻1 畿内之部 <sup>11)</sup> | 大和名所案内 <sup>12)</sup> | 大和めぐり <sup>13)</sup> | 大和名所舊蹟案内 <sup>14)</sup> | 大和巡禮：史蹟と古美術 <sup>15)</sup> | 大和名所新案内 <sup>16)</sup> | 大和めぐり <sup>17)</sup> | 肇国の聖跡を巡る <sup>18)</sup> |
|----------|-------------------|---------------------|------------------------------|-----------------------|----------------------|-------------------------|----------------------------|------------------------|----------------------|-------------------------|
| 大和宮      | ○                 | ○                   | ○                            | ○                     | ○                    | ○                       | ○                          | ○                      | ○                    | ○                       |
| 大和名勝     | ○                 | ○                   | ○                            | ○                     | ○                    | ○                       | ○                          | ○                      | ○                    | ○                       |
| 大和名所案内   | ○                 | ○                   | ○                            | ○                     | ○                    | ○                       | ○                          | ○                      | ○                    | ○                       |
| 大和めぐり    | ○                 | ○                   | ○                            | ○                     | ○                    | ○                       | ○                          | ○                      | ○                    | ○                       |
| 大和名所舊蹟案内 | ○                 | ○                   | ○                            | ○                     | ○                    | ○                       | ○                          | ○                      | ○                    | ○                       |
| 大和巡禮     | ○                 | ○                   | ○                            | ○                     | ○                    | ○                       | ○                          | ○                      | ○                    | ○                       |
| 大和めぐり    | ○                 | ○                   | ○                            | ○                     | ○                    | ○                       | ○                          | ○                      | ○                    | ○                       |
| 山の辺の道    | ○                 | ○                   | ○                            | ○                     | ○                    | ○                       | ○                          | ○                      | ○                    | ○                       |

### (2) ハイキングブームと大軌による周遊ルートの形成

1930年代は郊外レクリエーションが盛んになり、特にハイキング（徒歩旅行）が全国的にブームとなった。後に『山の辺の道』を発行する大阪電気軌道（以下大軌）では沿線観光案内誌『だいき』（昭和12年8月号）に「登山とハイキングー便利でお得な割引券・クーポン券」というハイキングのための乗車券割引を掲載、10のコースを提示しており、その中に後の「山の辺の道」の位置と一致する「天理から長谷寺へ」というコースを示した。ほかにも雑誌『観光の大和』や『大軌参急』には、この附近のハイキングコースが紹介された（表2）。これらの周遊コースは主に官幣大社や天皇陵をはじめとした聖蹟を巡るものであった。しかし、これらに掲載されたコースにも「山の辺の道」という名称は用いられていない。ただし、その道順は後の「山の辺の道」のルートにほぼ一致しており、現在の山の辺の道のルートの前身であったと考えられる。この時期、これらの道は点としての観光地を繋ぐ動線として認識されつつあった。

表-2 観光雑誌とハイキングコース

| 雑誌名                | ハイキングコース名                  | コース                                                       | 山の辺の道との重なり方                                  |
|--------------------|----------------------------|-----------------------------------------------------------|----------------------------------------------|
| 『観光の大和』<br>昭和13年1号 | 皇陵 大社を中心とした<br>一大和ハイキングコース | 阪井駅、大神神社、箸墓、兼行天皇陵、崇神天皇陵、倉田陵、大和神社、石上神宮、天理                  | △ 名所の順は一致しているが、箸墓、大和神社までのルートは不明。             |
| 『だいき』<br>昭和13年8月号  | 傳說を尋ねて                     | 大塚家、天理教本部、紋付石（堀原）、葦の足石（乙木）、蔵の五輪塔、しふと取り地蔵（中山）、白鳥神社（長柄）、長柄駅 | × 名所ルート共に不一致                                 |
| 『大軌参急』<br>昭和15年1月号 | 精進散歩（一）宮尾まもる               | 大塚家、石上神宮、永久寺址、葦の御所跡、常盤山御野立所跡、大和神社、崇神天皇御陵、兼行天皇御陵、大神神社、阪井駅  | ○ 名所の順は一致しているが、崇神寺一崇神天皇陵、兼行天皇陵一大和神社までのルートは不明 |

### (3) 観光案内書に現れる風景記述

大正から昭和初期にかけては古美術史蹟が評価され、古墳や旧蹟も鑑賞対象となった。観光案内書から風景記述の内容を抽出分析した結果、名所の情報以外の風景記述の量は非常に乏しかった。数少ない風景評価のほとんどが「美観なり」、「名山なり」といったシーン景観の美しさを端的に表現したものであった。しかし、一方で古墳を群として鑑賞する見方や、寂れた古寺や寺跡を評価する見方が芽生えはじめていた。山の辺の道の風景が大きく取り上げられ、表現されるのは、『山の辺の道』（1941）の発行によってであった。

## 3. 「山の辺の道」の形成

### (1) 紀元二千六百年記念事業と『山の辺の道』

大阪電気軌道の二千六百年記念事業により発行された十三冊の大和路叢書の一つ『山の辺の道』（1941）は、「山の辺の道」という名称の使用、そのルートの設定、充実した風景記述の質と量、という三点からみて後の山の辺の道の保全・整備のきっかけとなる重要な観光案内書である。その出版の背景について述べる。

「山の辺の道」のルートについて、『山の邊の道』には地図は示されなかったが、同時に北島葭江によって書かれ関西急行鉄道から出版された『萬葉集大和地誌<sup>23)</sup>』に初めて「山の辺の道」のルートが記載された(図-1)。同地図には柳本までしか記載されていないが、山の辺の道より西に通っている上街道とは確かに区別されている。



| 山の辺の道 三輪石上 |      |      | 山の辺の道 三輪石上 |      |      |
|------------|------|------|------------|------|------|
|            | 1941 | 1954 |            | 1941 | 1954 |
| 海沼稲市       | ○    | ○    | 穴師長主神社     | ○    | ○    |
| 緑城瑞巖宮跡     | ●    | ●    | 龍達天皇禪詰田幸玄宮 | ●    | ●    |
| 衣笠御懸奉神社    | ●    | ●    | 黒行天皇塚      | ●    | ●    |
| 高野の石塚      | ●    | ●    | 東野天皇塚      | ●    | ●    |
| 平等寺跡       | ○    | ●    | 磯城古墳群      | ●    | ●    |
| 三輪城跡       | ●    | ●    | 堀山古墳       | ○    | ○    |
| 三輪山        | ●    | ●    | 堀本の横穴古墳    | ○    | ○    |
| 三輪川        | ○    | ○    | 堀本         | ●    | ●    |
| 大塔神社       | ○    | ●    | 山の辺の里      | ○    | ○    |
| 額計大直禰子神社   | ○    | ○    | 長岳寺        | ●    | ●    |
| 三輪の茶屋      | ○    | ○    | 玉置塚        | ○    | ○    |
| 日寺神社       | ○    | ○    | 桑田塚        | ○    | ○    |
| 段原神社       | ○    | ○    | 大和神社       | ●    | ●    |
| 珠井川        | ●    | ●    | 下池山古墳      | ○    | ○    |
| 珠井神社       | ○    | ○    | 夜御殿神社      | ●    | ●    |
| 石河之上願影塚    | ○    | ○    | 逐馬神社古墳     | ○    | ○    |
| 衣鳥塚        | ○    | ○    | 石上神社       | ●    | ●    |
| 段原神社       | ○    | ○    | 石上寺跡       | ○    | ○    |
| 茅原         | ○    | ○    | 永久寺跡       | ●    | ●    |
| 栗原         | ○    | ○    | 西山古墳       | ○    | ○    |
| 高野・車谷      | ○    | ○    | 天理天皇墓 太郎   | ○    | ○    |
| 龍仁天皇祭所珠城宮跡 | ○    | ○    | 布留川        | ○    | ○    |
| 黒行天皇祭所日代宮跡 | ○    | ○    | 山の辺の道      | ●    | ●    |

○ 記載有  
● 風景記述有

■ 地名

□ 名所

本節では『山の邊の道』を分析対象とし、観光案内書中の風景記述の抽出、分析を通じて、文章中に表れた風景イメージの具体的内容について明らかにする。まず、抽出した風景記述を「風景を構成する要素」と「風景の印象・評価」の二つのカテゴリに分類する。抽出することができた風景構成要素を表-4 に示す。次に、「風景の印象・評価」は、風景記述のうち、形容表現や、感情、状態を表す文を抽出したものである。本研究では、これを5つの風景イメージの型（a シーン景観の美しさ、b 古代ロマン・懐古、c 神々しさ・神聖、d 歌・伝説、e 国家・天皇の威徳）に分類した上で、各イメージの型について分析を行う。

|         |                                                                                                                                                                   |
|---------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| A自然景観   |                                                                                                                                                                   |
| 山       | 傘蓋形 三輪山 大和平野東側の山地 山容 四十八峰といはれる峰々 山麓 大和三山<br>権根 初瀬山 山並み 巻向山や猪王山の山裾 山々の傾斜 釜口山                                                                                       |
| 川       | 初瀬川 清流 水懸 流れ 小川 狹井川 細流 川幅 水 河べり 巻向川の水垣                                                                                                                            |
| 植物      | 翠柑 緑 杉 椎木 紅葉 桜樹 山百合の花 常緑樹 森                                                                                                                                       |
| 季節・天気   | 蜜柑畑の實の熟する頃                                                                                                                                                        |
| その他     | 玄奘谷 大和國原 丘草のながれ 小丘                                                                                                                                                |
| B農村景観   |                                                                                                                                                                   |
|         | 標石 道 桑と蜜柑を植えた小高い臺地 標木 穴師の里 茶畑 蜜柑畑                                                                                                                                 |
| C寺社旧跡景観 |                                                                                                                                                                   |
|         | 廣前 玉砂利 禁足地 拝殿 三輪鳥居 小庵 白壁 古びた石燈籠 山門建築 参道<br>出雲建神社の高地 翠緑の老樹 丹塗の社殿 布留の神杉 石垣の残片 跡地 寺跡                                                                                 |
| D古墳景観   |                                                                                                                                                                   |
|         | 起伏 古墳の群 古墳群 古墳地帯 前方後円墳 陵上 御陵                                                                                                                                      |
| 非景観要素   |                                                                                                                                                                   |
| 感覚      | 山百合の匂い 布留川の流                                                                                                                                                      |
| 史実・想像   | 崇神天皇山邊道勾岡上陵、景行天皇山邊道下陵の名 古き山邊道の面影 磯城金刺宮 赤<br>良泉の紀元2600年記念事業『狹井川の上』の情景だ                                                                                             |
| 歌・文学    | 『足引の山川の瀬の鳴るなべに月が嶺に雲たわちたる』(万葉集卷7)<br>『霜の山には波たちぬ巻向の月が嶺に雲居立つらし』(万葉集卷7)<br>『三諸の神の帯はせる初瀬川水脈し絶えず吾忘れめや』(万葉集卷9)<br>『三諸のその山並に手が手を巻向山は嶺ごのよろしも』(万葉集卷7)<br>『市はつば市』(清少納言『枕草子』) |

山の辺の道では複数の景観要素から成る重層的な風景が代表的な山の辺の道の風景として捉えられており、何方向にもある要素を一つのまとまりある風景として捉えているもの(①)、中景にある草や樹木から遠景

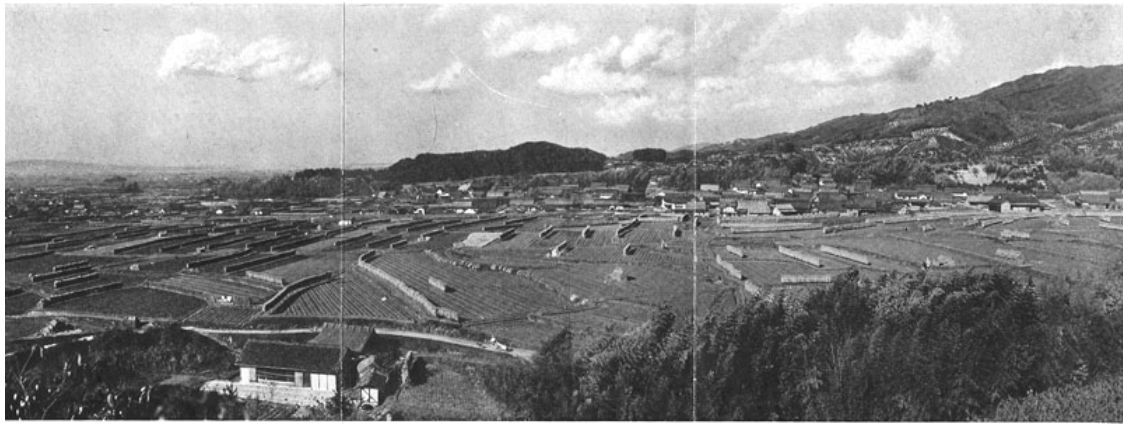


図-2 山邊道風景（『山の邊の道』1941より）

の山容へと奥行きをもって風景を表現しているもの（②）がみられた。

山容景観では当時有名な景物であった大和三山より、東の山地（三輪山、巻向山、釜口山等）のほうが風景記述が多く東側の山を高く評価していた（③, ④, ⑥）。古墳景観については、群として一望のもと捉える見方がみられ、それに対する驚きや「奇景」といった印象をもつものが抽出された（⑦, ⑨）。また、それ以前にはみられなかった、農村景観の要素である「茶畑」「蜜柑畑」が挙げられ、「美はしい黄金色の斑點が陽光に映える」のように田畑の美しさに対する評価もみられた（⑧）。

寺社旧跡については、玉砂利や白壁などの一要素に注目する見方や、樹や森と建築といった、自然と人工物を合わせて1つの風景としてみる記述もみられ、多様な風景を見出していることがわかる（⑫, ⑭）。

表-5 a. シーン景観の美しさ一覽

| 場所        | 要素                                                           | 印象・評価                                                                                               | 性質                       |
|-----------|--------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------|
| ① 檜原      | 檜原の跡地 三輪山のなだらかな尾根が西北に突出 三方開けて 南に玄寶谷 北に巻向川の水垣                 | 浄地である<br>優美緑色の傳説地                                                                                   | 領域的風景<br>眺望              |
| ② 巻向      | 見はるかす大和國原 うしろにある背負う山並み なたらかな丘阜のながれ、起伏する里のあたりに望む鬱蒼と樹木の茂った古墳の群 | 今も昔も人々の心を捉へずにはおかぬ土地である<br>万葉歌人の吟詠の題材となった場                                                           | 東山 山容                    |
| ③ 三輪山     | 築造形 大和平野東側の山地                                                | 秀麗な<br>明瞭な                                                                                          | 東山 山容                    |
| ④ 三輪山     | 蓋を伏せたやうなほつかりと                                                | 秀でた                                                                                                 | 東山 山容                    |
| ⑤ 四十八峠    | なだらかな膚 緑の厚着                                                  | 何という物柔らかさ                                                                                           | 東山 視覚的触感                 |
| ⑥ 狭井川     | 大和三山                                                         | 土地高峻、西に大和三山を臨む景勝の地                                                                                  | 大和三山 景勝地                 |
| ⑦ 大和神社参道前 | 山々の傾斜 三輪の圓蓋丘 古墳群                                             | 不思議なほど眼近く見渡される<br>一番美しい姿<br>姿のうつくしい<br>見渡すがよい                                                       | 東山 眺望<br>東山 山容<br>古墳群 眺望 |
| ⑧ 山の辺の里   | 茶畑 蜜柑畑 蜜柑畑の實の熟する頃                                            | 美はしい黄金色の斑點が陽光に映える                                                                                   | 農村景観<br>季節               |
| ⑨         | 實地 古墳群                                                       | 一望波瀾の如しといふ形容詞も決して大袈裟ではないと思ふ<br>おびただしい<br>その數に於てこれに及ぶものがあるまい<br>丘と云はず、野と云はず、見わたす限り果々として足を踏み入れるところもない | 古墳群 眺望<br>古墳群 眺望         |
| ⑩ 大神神社    | 帯目も鮮やかな玉砂利                                                   | 陽光に輝いている                                                                                            | 寺社旧跡景観                   |
| ⑪ 玄寶庵     | 白壁 小庭                                                        | 閑静な                                                                                                 |                          |
| ⑫ 長岳寺     | 釜口山をバックとした景趣                                                 | 美しい                                                                                                 |                          |
| ⑬ 大和神社    | 建築は藤原時代の風趣                                                   | 優しく且つ瀟灑な感じ                                                                                          |                          |
| ⑭ 石上神宮    | 参道両側の森や大社 翠緑の老樹と丹塗の社殿                                        | ふさはしい姿をよく備えている<br>相映じてすばらしい建築美                                                                      |                          |

## b)古代ロマン・懐古

古代ロマンや懐古に関わる風景記述を表-6 に記す。  
そのイメージのルーツを時代に区分すると、古墳時代、

飛鳥から奈良時代、中世以降、と不明なものの4つに分けることができた。時代ごとにみると、古墳時代の懐古では伝説や古代の天皇史実にある当時の輝かしい日々の情景をイメージしている（①-④）。これは紀元二千六百年を反映した風景イメージであると推察される。

飛鳥奈良時代では、万葉文学などの古典文学が形成された時期で歌や歌人の存在を偲んでいる（⑥, ⑦）。中世以降や不明なものに関しては、開発や明治時代の廃仏毀釈といった時代の流れによって失われ、あるいは変化した要素に対して寂しい気持ちや、興亡の感が風景イメージに表れている。（⑧-⑭）

要素に着目すると、遠景の山から近景の山百合の花まで幅広く、山の辺の道には懐古に結び付けられる要素が多く存在することがわかる。またそれらの要素によって懐古する時代も幅広く、歴史の集積を感じる風景の見方が既にこの時期に存在していた。

表-6 b. 古代ロマン・懐古一覽

| 場所           | 要素                                                         | 印象・評価                                                                             | 性質（時代）                   |
|--------------|------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------|--------------------------|
| ① 山の辺の道      | 道                                                          | 草に埋れ、水に荒らされ<br>國史の悠久 私達はありありと山邊道の遺跡を探り得る<br>輝かしい過去の名残をとどめ<br>ありありと山邊道の遺跡を探り得る     | 古墳時代<br>（a497-<br>ad29）  |
| ② 天皇陵        | 崇神天皇山邊道勾欄上陵、景行天皇山邊道上陵の名                                    | 崇神天皇の聖地                                                                           |                          |
| ③ 茅原         | 『神樂田』『神樂橋』という地名の残っていること                                    | 懐古の聖地                                                                             |                          |
| ④ 初瀬川        | 織姫金刺宮                                                      | 川の流れて影を浮かべていたことだらう                                                                | 新明天皇時代<br>（ 539-<br>571） |
| ⑤ 三輪山        | 三輪山                                                        | 上代日本の國家統一の物語や原始信仰の名残を秘めた<br>古代社会の中心であったことを想ひ<br>太古への幻想や古代への郷愁といったものが心の奥に表裏するのを覚える | 飛鳥一奈良時代                  |
| ⑥            | 三輪山                                                        | 自然美に懷れた上代人の心をいかに強く惹きつけたであろうことを感ずる                                                 | （万葉・古事記・古今集）             |
|              | 三輪山の丘のほとり                                                  | 往路を追憶                                                                             |                          |
|              | 國家統一にいそまれた大和朝廷の金色の諸將軍の姿                                    | 回想                                                                                |                          |
| ⑦ 巻向         | 巻向                                                         | 古情を豊かに包む<br>古い風の匂いを嗅ぎながら<br>押え難い回顧の念が頭を擡げる                                        |                          |
|              | 見はるかす大和國原 うしろに背負う山並み なたらかな丘阜のながれ、起伏する里のあたりに望む鬱蒼と樹木の茂った古墳の群 | 今も昔も人々の心を捉へずにはおかぬ土地である                                                            |                          |
| ⑧ 山の辺の里      | 南方後円墳                                                      | 跡地の發達に伴って削り取られ、むしりとられて<br>経く小さくなって来た<br>最後まで破壊されないうで残っている所に注意をひく                  | 中世以降                     |
| ⑨ 海拓稲市       | 新舊二つの標石                                                    | 面白さを感じる                                                                           | 不明                       |
| ⑩ 狭井川        | 山百合 数本の山百合の花                                               | 盛に繁茂していた 昔を偲ばせるのみ                                                                 |                          |
| ⑪ 長岳寺        | 山門                                                         | 寺運衰退の状況                                                                           |                          |
| ⑫ 巻向山や龍王山の山裾 | 巻向山や龍王山の山裾                                                 | 山辺道の跡が偲ばれる                                                                        |                          |
| ⑬ 王山の山腰      | 起伏する丘阜のあひだ                                                 | 興亡盛衰の感を深くするものがある                                                                  |                          |
| ⑭ 永久寺跡       | 寺跡                                                         | 依然として昔懐かしい石上布留の土地だと感じさせられるのは嬉しい                                                   |                          |
| ⑮ 布留川        | 布留川の流                                                      |                                                                                   |                          |



c)神々しさ・神聖

神々しさ・神聖さについての風景記述を表-7に示す。古来信仰の対象として崇めていた自然物や古代の信仰や祭事が行われた社寺等、太古からの歴史を持つ名所に対して神聖さをイメージしている風景の見方がみられた。特定の景観要素や見方をもって風景をみるというよりは、「閑寂の気が全境内にみちみちている」「廻らした浄地である」というように固有の場所性や寺社の領域を感じ取りイメージを持つ記述が多く見られた。

表-7 c. 神々しさ・神聖一覽

| 場所      | 要素                      | 印象・評価                                                  | 性質    |
|---------|-------------------------|--------------------------------------------------------|-------|
| ① 大神神社  | 三輪鳥居                    | 厳然と<br>信仰上いかに重視されてきたかを感じさせられる                          | 古代の信仰 |
| ② 長岳寺   | 山門                      | 暖びつつ<br>閑寂の気が全境内ににみちみている                               |       |
| ③ 茅原    | 神樂田 神樂橋                 | 倭草緑色の草地<br>雄偉な祭祀の聖域であったことを想察せしめる                       |       |
| ④ 布留    | 布留の神杉                   | 轟々として点を穿する廣大にして幽邃な神域の<br>容態<br>神武天皇建國の由来を追憶せしめるにはふさはしい |       |
| ⑤ 檜原神社跡 | 檜原の跡地 三輪山 玄宮谷<br>熊向川の水垣 | 廻らした浄地である                                              |       |
|         |                         | 神事を行はせられるに、最も適した土地であったと拝察される<br>何かに至る森厳の感を覚えしめる        |       |
| ⑥ 大和神社  | 陽光 淨域の緑                 | 太古の塵をみせて森厳そのもの                                         |       |
| ⑦ 三輪山   | 山容 翠巒                   | 侵し難い威厳に満ちた<br>山顔溢れる<br>しばし心を驚けれる                       |       |

d) 歌・伝説

歌や伝説に関する風景記述を表-8に示す。歌・伝説では万葉歌や万葉歌人が多く抽出された。『山の邊の道』では、歌の内容だけではなく、万葉歌人という人を主体としての彼らの見ていた風景を想像している記述が見られた。特に巻向で柿本人麿との結びつきが強く、「好んでこの地を歌い、又ここにたつて香具山あたりの風物を詠じたであらうと思はれるものがある」とあるように、歌人と歌と歌に詠まれた景物という三つの要素から、当時の情景を思い描いていたと推察される。

表-8 d. 歌・伝説一覽

| 場所           | 要素                      | 印象・評価                                                                 | ループ（歌・伝説）                                                              |
|--------------|-------------------------|-----------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------|
| ① 三輪山<br>初瀬川 | 萬葉の歌人 初瀬川の流れ            | 青々と陽光にきらめく<br>萬葉の歌人が三輪山を制して抱く尊卑の念の如何に<br>深かたを想像し得よう<br>などという雄健な理想であらう | 「三諸の峰の帯はせ<br>ぬ 初瀬川水銀 流る<br>万はせ吾れもたす」                                   |
| ② 三輪山        | 山容と水態                   | 万葉歌人の雄壯した歌仕                                                           | 万葉歌人 歌仕                                                                |
| ③ 巻向         |                         | 好んでこの地を歌い、又ここにつたって香良山あ<br>たり風の風物を詠じたのであらうと思われるものがある                   | 「足引の山河の瀬の<br>鳴るなかに月が歌い<br>に雲たわわたる」<br>「満足川かは波たぢ<br>ぬ巻向の月が嵐に<br>雲居立つらう」 |
|              | 柿本人麿                    | 歌聖柿本人麿も好んで巻向の地をうたった                                                   | 「三諸のその山並に<br>子等が手を巻向山は<br>廻さのよるしも」                                     |
|              | 巻向、蒲足、由槻                | 萬葉歌人の吟詠の題材となったものである                                                   | 万葉歌人                                                                   |
| ④ 狭井川        | 狭井川 大和三山                | 土地高峻 景勝の地                                                             | 「狭井河の上」の傳説地                                                            |
| ⑤ 僧原         | 僧原の跡地 三輪山 玄倉谷<br>巻向川の支流 | 平地である                                                                 | 機織姫隠居跡<br>倭室緑色の傳説地                                                     |
| ⑥ 海柏檀子       | 海柏檀子 三輪町金屋              | 「今も海柏檀子観音の昔に昔の名残をとめてい                                                 | 清少納言「檀子寺」<br>「海はつばさ」                                                   |

e)国家・天皇の威徳

国家・天皇の威徳についての風景記述を表-9に示す。崇神・景行天皇陵から天皇の威徳の印象が抽出され、他の印象や評価を持たないことから、天皇陵は天皇に対する敬意のイメージと直結することがわかった。高木博志が「天皇制の装置として古都の創出に関わって

重要な要素に、陵墓と御物があるだろう<sup>24)</sup>と述べているように、天皇陵はこの当時の「聖地大和」における天皇制の象徴として重要な要素であったと考える。

表-9 e. 国家・天皇の威徳一覽

| 場所     | 要素                      | 印象・評価                                       | 性質       |
|--------|-------------------------|---------------------------------------------|----------|
| ① 天竺の道 | 道                       | 國の宗と共にとしなへに誇るに足る                            | 国家・天皇の威徳 |
| ② 天皇陵  | 祭天神皇山邊道勾岡上陵、景行天皇山邊道上陵の名 | 輝かしい過去の名残をとどめ                               |          |
|        | 景行天皇陵                   | うただ感慨の湧き起こるを禁じ得ない                           |          |
|        |                         | 御威徳の弘大をそぞろに偲びまつ                             |          |
|        | 祭天神皇陵                   | おのづからその莊嚴の氣に打たれて、真にはつくりしらすめらみこの漢業を感銘せざるを得ない |          |

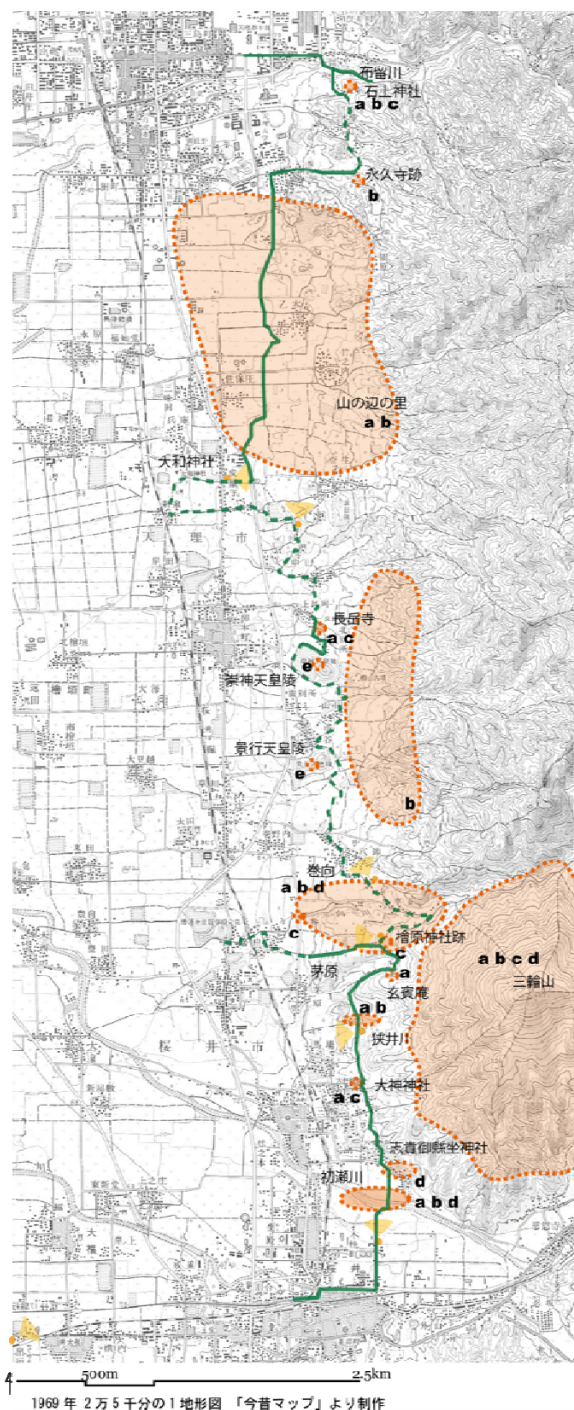


図-3 各場所に表れる風景イメージ

(4) 場所ごとに表れる風景特徴

場所ごとの特徴を記した（図-3）結果、三輪巻向間では特に多様な風景イメージが表れており、山の辺の道の代表的な風景を形成している場所であったことが分かる。官幣大社や三輪山等有名な史蹟では、一つの景物から多様な風景イメージが見出された。それとは対照的に、天皇陵では国家・天皇の威徳以外のイメージと結びつくことは無かった。史蹟での風景イメージが大半を占めるが、巻向、龍王山の麓一体、山の辺の里と呼ばれる古墳群と田園地域といったエリアでは眺望に関する風景記述もしばしばみられた。

(5) 『三輪石上』に表れる風景イメージ

『三輪石上』（1954）を対象に、『山の辺の道』と同様の分析を行い、両者の比較検証を行う。「a シーン景観の美しさ」では、新たに農村の風景構成要素が追加された。農村風景や植物の要素からは、季節や気候による風景の移り変わりや、色彩の鮮やかさが風景に表現されていた。非景観要素である音も新たに風景の中に組み込まれ、より体感的な風景の見方が提示された。「b 古代ロマン・懐古」では時代が特定できない、漠然としたノスタルジーを風景から感じる記述がより多くみられた。「c 神々しさ・神聖」では自然の景物が神聖さを示すものとして多く抽出された。「d 歌・伝説」では万葉集のほか、謡曲『三輪』や松尾芭蕉の句のイメージが見出された。特に謡曲『三輪』では場所だけではなく、季節や天候も一致させ、一場面として風景を眺めている。『三輪石上』では「e 国家・天皇の威徳」の記述はみられなくなった。戦後、天皇に関する記述や国史に関わる記述自体が減少し、それらに関するイメージが著しく減少したことがわかる。

『三輪石上』（1954）では『山の辺の道』で重要視されていた教養を持った風景の見方はやや薄らいだ。その分、風景要素の多様化がみられ、名所や史蹟だけでなく、何気ない道のあちこちにある風景に価値が見出され、より風景が広がりをもせたといえる。

(6) 戦後の回遊型の歩き方による風景イメージの展開

戦後、観光地として徐々に人気を高めた「山の辺の道」では、観光案内書の個性化が進み、様々なスタイルの観光案内書が出版された。それらは史跡古美術観賞を目的とするものとは異なり、歩きながら眺められる風景を純粹に楽しむ見方をより強く提示した。このような回遊型の歩き方は、道中あちこちにある景観要素を視覚的に見て楽しむ歩き方であり、風景形成期で見られた a シーン景観の美しさから発展したものである。

『三輪石上』（1954）には 30 枚の写真が掲載されて

おり、これから視覚的風景の重視が読み取れるが、それ以降、1960 年代にも写真を載せる観光案内書、掲載枚数は増加した（表-10）。1960 年後半で集落や町並みが風景の対象物となり、各集落の風景が写真に収められた。三輪での素麺干しの光景、山際の野の道、田園風景、山の辺の道の道脇の石仏や、名所の途中にある舗装されていない参道といったこれまで取り上げられずにいた風景要素が見出され、風景として評価されるに至ったことがわかる。

表-10 観光案内書に掲載された写真一覧

| 年    | 書名          | 著者             | 出版社     | 枚数 | 構成要素     |      |      |        |       |       |       |     |   |   |
|------|-------------|----------------|---------|----|----------|------|------|--------|-------|-------|-------|-----|---|---|
|      |             |                |         |    | 高瀬・山・川・橋 | 自然景観 | 農村景観 | 集落・町並み | 田園・水田 | 寺社・史跡 | 古墳・美術 | その他 | 人 | 歌 |
| 1930 | 大和巡禮・史蹟と古美術 | 小島貞三           | 大和史蹟研究会 | 5  |          |      |      |        |       |       |       |     |   |   |
| 1941 | 山の辺の道       | 橋本雪嶺（著）新井和臣監   | 近畿観光会   | 4  | ○        | ○    |      |        |       | ○     | ○     |     |   |   |
| 1943 | 萬葉大和風土記     | 堀内屋一著          | 天理時報社   | 2  |          | ○    |      |        |       |       |       |     |   |   |
| 1954 | 三輪石上        | 近畿日本鐵道株式会社近畿文化 | 経典書     | 30 | ○        | ○    |      |        |       | ○     | ○     | ○   |   |   |
| 1955 | 万葉の橋        | 大塚孝            | 社会思想社   | 18 | ○        | ○    |      |        |       | ○     | ○     |     |   |   |
| 1956 | 奈良の散歩みち     | 美谷明道等著         | 山と溪谷社   | 15 | ○        | ○    |      |        |       | ○     | ○     |     |   |   |
| 1957 | 万葉の散歩みち     | 朝日新聞社編         | 朝日新聞社   | 9  | ○        | ○    |      |        |       | ○     | ○     |     |   |   |
| 1959 | 山の辺の道       | 田中 日佐夫 入江泰吉写真  | 三彩社     | 24 | ○        | ○    | ○    | ○      | ○     | ○     | ○     | ○   |   |   |
| 1971 | 大和路         | 朝日新聞社編         | 朝日新聞社   | 35 | ○        | ○    | ○    | ○      | ○     | ○     | ○     | ○   |   |   |
| 1972 | 山の辺の道       | 朝日新聞奈良支局編      | 朝日新聞社   | 22 | ○        | ○    | ○    | ○      | ○     | ○     | ○     | ○   |   |   |
| 1973 | 万葉路 山/辺の道   | 保田 興重監／著       | 新人物往來社  | 21 | ○        | ○    | ○    | ○      | ○     | ○     | ○     | ○   |   |   |

4. 「山の辺の道」における景観保全施策

(1) 景観保全施策の展開

本章では、再発見された「山の辺の道」が、東海自然歩道による整備（1974）に至るまでに、どのように景観保全施策に位置づけられたか、各制度上の位置づけとその変遷について分析を行う。関連する景観保全施策を表-11 に示す。

表-11 山の辺の道における景観保全施策 年表

| 年    | 出来事                                    |
|------|----------------------------------------|
| 1963 | 昭和38年3月 近畿圏整備法                         |
| 1966 | 昭和41年10月11日 桜井市 三輪山の辺風致地区              |
| 1967 | 昭和42年12月15日 天理市、橿原市及び桜井市歴史的風土保存区域      |
| 1968 | 昭和43年4月27日 天理市 山の辺風致地区                 |
| 1969 | 昭和44年4月27日 石上神宮、崇神景行天皇陵、三輪山歴史的風土特別保存地区 |
| 1969 | 昭和44年1月 東海自然歩道構想                       |
| 1970 | 昭和45年12月28日 大和青垣国定公園指定                 |
| 1974 | 昭和49年 東海自然歩道整備完成                       |

昭和 38（1963）年、山の辺の道周辺一体は近畿圏整備法「平城山の辺保全区域」として保存区域に指定された<sup>26)</sup>。これが最初の景観保全施策である。その後まもなく昭和 41（1966）年 10 月 11 日に「三輪山の辺」が風致地区に指定された。指定にあたり、「東部及び南部地域は名勝史蹟並古文化財が散在」していることが理由とされた。その翌年の 1967 年 12 月 15 日には、古都における歴史的風土の保存に関する特別措置法（古都保存法）による「天理市、橿原市及び桜井市歴史的風土保存区域」が指定された。ここで「天理市、橿原市及び桜井市歴史的風土保存計画（石上・三輪地区）」

によると「本地区の歴史的風土保存の主体は、石上神宮、大神神社及び崇神天皇陵、景行天皇陵等の大形古墳並びに、現存最古の道といわれる山の辺の道等と一体となる自然的環境の保存にあり<sup>27)</sup>」とあり、「山の辺の道」が「日本最古の道」として、その歴史的価値が訴えられていることがわかる。

この歴史的風土保存区域の指定に当たって歴史的風土審議会で2回の審議（第5回、第6回歴史的風土審議会）が行われたが、その際議論の争点となったのは、「学術的根拠はないながらも、記紀や万葉集に表れたイメージによるものをどう位置づけるか」ということであった<sup>28)</sup>。すなわち学術上不明確な古墳、陵、道、遺跡、そしてこれが伝承説話、文学、特に万葉集に現れたイメージによるものを、どう価値体系の上から区別するかという議論であったが、寺尾勇によると、審議の中で「「山の辺の道」「三輪山」「藤原京」「大和三山」「飛鳥」のような、神話や文学、説話、それに万葉によるイメージから構成され、必ずしも史実の確証されたものや、明確な古文化財の核が欠如していても指定すべきである」との意見が有力になった<sup>29)</sup>という。ここで評価された「山の辺の道」のイメージは、近代において形成されたイメージであったが、これが残された景観とともに、歴史的風土としての、すなわち文化財としての評価を得るに至ったのである。

その他にも、寺尾は「文化財の周辺の集落、民家、産業、街路、田畑、気候など人間生活の一切を含めた人文景観的なものを含むのは当然である<sup>30)</sup>」と述べており、自然景観、精神的景観に加え、人文景観の保存の必要性を説いているが「人文景観」については完全に包括することは叶わず、風致地区でカバーすることが示唆されていた。

その翌年（1968）4月27日には「天理市山の辺風致地区」が指定され、歴史的風土保存区域指定の審議会において問題となっていた天理市の風致地区未指定区域は解消した。その理由書には「当地域は「山の辺の道」と呼ばれる古代の道を中心に大小の古墳や由緒深い社寺、美しい民家、集落等があって、自然と一体になって勝れた歴史的景観を示している<sup>31)</sup>」とあり、歴史的風土保存区域と同様に、自然景観と一体となった古墳や民家、集落等の景観が評価されたと同時に、より山の辺の道に重点が置かれ、山の辺の道を中心とした景観保全の必要性が示された。ただし、この「古代の道」というものは史実の裏付けを伴ったものではなかったことは注意が必要である。ただし、歴史的風土保存地区の指定における課題であった集落部分は、風致地区の範囲にも含まれない結果となった。

## (2) 東海自然歩道と大和青垣国定公園

東海自然歩道の構想は昭和44（1969）年1月に厚生省で発表された。その際、自然公園であること、東京—大阪間を結ぶ歩道であることの2点の必要性が挙げられた<sup>32)</sup>。当初範囲外であった山の辺の道は、同年5月の「国民自然歩道の構想 第一次計画東海自然歩道について（第二次路線案）」において東海自然歩道への参入が決定した。

一方、奈良県では、開発が進む青垣山を守ろうと、昭和39（1964）年頃から新しく自然公園を県で制定する動きが高まっていた。昭和41（1966）年12月20日に県立自然公園条例が制定され、昭和44（1969）年9月に「県立山の辺自然公園の構想」が提出された。本構想は「たまたま厚生省で計画中の東海自然歩道の路線に当たり、（中略）区域を広め国定公園への昇格を促進したい<sup>33)</sup>」と、東海自然歩道との関連、大和青垣国定公園への昇格を見越した上での県による構想であった。また、初期の構想ではその附図に、初瀬から山の辺の道を通り奈良市に続く遊歩道が記載されており、これが初めての具体的な地図に落とし込まれた東海自然歩道の計画ルートだと考えられる<sup>34)</sup>。翌年の昭和45（1970）年1月に「奈良県大和青垣国定公園候補地・公園区域及び公園計画案<sup>35)</sup>」がだされ、同年12月28日に大和青垣国定公園指定されるに至った。この国定公園指定案では、「東海自然歩道を中心として、保護地帯を設け、山の辺の道周辺及びその東部丘陵地帯を開発による破壊から護り、さらに積極的に修景を施し、自然環境を保護する」と東海自然歩道の整備と一体となった保全修景の方針が示された。東海自然歩道の整備は国定公園指定後の昭和45-46（1970-1971）年にかけて行われたが、集落内で多少の変更はあるものの風景形成期の観光案内書に掲載されたルートをほぼ踏襲した。一方、歴史的風土保存区域では保全範囲外となった人文景観である集落地域は、「普通地域」として県立山の辺自然公園の構想によって初めて含まれ、そのまま大和青垣国定公園において指定された。内容自体は「特に規制がない」「住民の協力による風致維持」と明記されており<sup>36)</sup>、強い規制の対象とはならなかったが、その価値が位置付けられたことは意義があろう。

## 5. 結論

本研究では以下の点について明らかとなった。

昭和初期、三輪石上（後の山の辺の道）に点在する史跡名所は、徐々に観光案内書に取り上げられ、観光対象としての価値が見出されていった。その一方で、

大阪電気軌道も、名所間をつなぐハイキングルートとして紹介しはじめた。そしてこの道が、日本書紀に現れた「山辺道」という史実とともに、大和路叢書『山の邊の道』（1941）のなかで「山の辺の道」として、そのルートともに沿線の風光美が紹介されることとなった。その背景には、1930年代以降のハイキングブームと、皇紀二千六百年事業に伴う観光振興の動きがあった。これが後の「山の辺の道」の形成のきっかけであった。すなわち、その道は大軌の編集部によって「再発見」された道であったといえる。一方、『山の邊の道』には、これまでにない量と質の風景の記述が見出された。その風景のイメージは、自然や農村などのシーン景観の美しさのほかに、古代ロマン・懐古、神々しさ・神聖、歌・伝説、国家・天皇の威徳などにわたる、実に多様なものであった。

昭和 15（1941）年以降、山の辺の道としてのルートの形成・定着と、近代的風景の評価が進み、山の辺の道は古代のイメージを喚起させる道として定着していく。すなわち、日本最古の道というコンセプトおよび関連する史実、伝説、物語に関連づけられながら、点在する陵墓や古墳群、古代の信仰のシンボルである三輪山の山容、古い集落、万葉集に詠まれた場所の景観が「古代ロマン」や「懐かしさ」という印象とともに、評価されていった。

1960年代になると、山の辺の道の景観が、古都保存法により文化財としても位置づけられるようになった。その審議の際には、学術上不明確な古墳、陵、道、遺跡であっても、神話や文学、説話、万葉のイメージなどから構成されている景観であれば、必ずしも史実の確証されたものでなくとも指定すべきであるとの意見が有力となり、指定に至った。そして、その後の「県立山の辺自然公園の構想」（1969）、「大和青垣国定公園」（1970）等の景観保全施策においても、「山の辺の道」は三輪石上地域の景観上の核として認識された。その考え方は、東海自然歩道とその整備にも引き継がれ、山の辺の道自体も東海自然歩道として整備が行われた結果、現在にも継承されるハイキングコースとして定着した。

## 参考文献・注

- 1) 都市再生整備計画（第3回変更）、奈良県天理市、平成21年3月、2009
- 2) 山口敬太：京都の野における風景の発達と持続に関する研究、2009年度京都大学学位論文（主に4章）
- 3) 大宮守誠、三岡亮：山の邊の道、近畿観光会、1941  
ただし、著者の人物像について詳細は分かっていない。
- 4) この東海自然歩道は昭和 43（1968）年から整備が開始され、昭和 50（1975）年に整備が完了した。

- 5) 国立国会図書館の検索によると、その名称をタイトルに含むものだけでも、「山の辺の道」13冊、「山辺の道」6冊（2010.8）が数えられる
- 6) 池田末則：「山辺ノ道」名義考、『大和美』75、1988
- 7) 千田稔：山の辺と磐余、『風景の考古学』、地人書房、1996
- 8) 和田萃：山の辺の道の歴史的意義、『古代を考える山辺の道』、吉川弘文館、1999
- 9) 水木要太郎：大和巡、第五回内国勲業博覧会奈良県協賛会、1903
- 10) 藤園主人：大和名勝、金港堂、1903
- 11) 田山花袋：新撰名勝地誌巻1畿内之部、1911
- 12) 奈良縣：大和名所案内、奈良縣、1914
- 13) 大阪鐵道局：大和めぐり、日本旅行協會、1928
- 14) 奈良縣：大和名所舊蹟案内、奈良縣、1928
- 15) 小島貞三：大和巡禮：史蹟と古美術、大和史蹟研究会、1930
- 16) 坂田静夫：大和名所新案内、東洋圖書、1930
- 17) 日本旅行協會：大和めぐり、ジャパンツーリストビューロー、1936
- 18) 安達忠一郎編纂：肇国の聖跡を巡る、大阪電気軌道株式会社百貨店部、1940
- 19) 奈良県：奈良県政七十年史、奈良県、pp.957、1962
- 20) 大阪電気軌道：大阪電気軌道三十年史、大阪電気軌道、1940
- 21) 大軌参急、昭和 14 年 5 月号
- 22) 近畿日本鐵道株式会社近畿文化會：三輪石上、綜藝舎、1954
- 23) 北島葭江：萬葉集大和地誌、関西急行鐵道、1941
- 24) 前掲 山の邊の道 pp.39
- 25) 高木博志：近代天皇制と古都、岩波書店、2006
- 26) 近畿圏整備本部：近畿圏計画図、1965
- 27) 天理市、橿原市及び桜井市歴史的風土保存計画（石上・三輪地区）、奈良県企画部風致保全課編：古都における歴史的風土の保存に関する特別措置法奈良県風致地区条例その他関係法令集、1981
- 28) 歴史的風土審議会議事録、第 5 回（1967）、第 6 回（1967）
- 29) 寺尾勇：古文化財と風土、国定公園 vol.247、pp.4、1970
- 30) 前掲 古文化財と風土、pp.4
- 31) 奈良県天理市：風致地区の指定申請書、1968
- 32) 東海自然歩道の構想；国立公園協會：国立公園、pp.1、1969
- 33) 奈良県：県立山の辺自然公園の構想』pp.2、1969
- 34) 前掲『県立山の辺自然公園の構想』、山の辺県立自然公園保護計画図
- 35) 奈良県：大和青垣国定公園候補地 公園区域及び公園計画案、1970
- 36) 前掲 大和青垣国定公園候補地 公園区域及び公園計画案